

せっかく彼女ができた僕が美人な後輩に喰われた話

サークル名：　裏森
作者　：うらもり

目次

プロローグ：サークルの飲み会で、甘い地雷.....4

第一章：なみの誘惑.....8

第二章：意思に反して吸い出される濁液エラー！ ブックマークが定義されていません。

第三章：快楽に溺れる、戻れない夜エラー！ ブックマークが定義されていません。

第四章：快楽に飲まれるエラー！ ブックマークが定義されていません。

第五章：もう何も考えられないエラー！ ブックマークが定義されていません。

エピローグ：意思まで吸い取る極上の・・・エラー！ ブックマークが定義されていません。

【参考】

坂下りく（20）　171cm 59kg

北宮なみ（19）　159cm 43kg　Eカップ

プロローグ：サークルの飲み会で、甘い地雷

四月の週末。大学近くの居酒屋は、新歓コンパの熱気で飽和していた。
安っぽい揚げ油の匂いと、タバコの煙、そしてアルコールの臭気が混ざり合った独特の空気。
「ウェーイ！　飲んでるー！？」という体育会系のコールが飛び交う中、坂下りくはジョッキの縁についた水滴を指で拭いながら、少しだけ身を縮めて烏龍茶を啜っていた。
（……すごい熱気だな。やっぱり、こういう雰囲気はまだ慣れないや）
りくはテーブルの下でこっそりとスマホを取り出し、画面をタップした。
『明日のデート、楽しみにしてるね！　十時に駅前集合だよ！』
高島ゆづはからの連絡。
その文面を見るだけで、ざわついた心が温かいもので満たされていく。
りくは高校まで、美術部でキャンバスに向かうだけの地味な学生生活を送っていた。いわゆる「陰キャ」だ。
大学に入ってからもその根っこは変わっていない。
けれど、そんな自分に優しく声をかけてくれ、好きだと言ってくれたのがゆづはだった。
人生で初めてできた、大切な彼女。
彼女がいるという事実だけで、自分のような人間でもここにいていいんだと肯定されているような、そんな安心感があった。
「りくー、お前全然飲んでないじゃん！　大丈夫？」
「あ、ごめん。明日朝早いから、今日はこれで……」
友人の絡みに、りくは申し訳なさそうに苦笑いで返す。

明日はゆづはとのデートだ。万全の体調で行きたいし、変に酔っ払って失敗したくない。
そろそろ帰るタイミングを見計らおうかな……そう思った、その時だった。
ドサッ。
隣の席に、重くて温かい何かが倒れ込んできた。
「……んぅ～、りくセンパイぃ……。ここ、空いてますかぁ？」
甘ったるい、鼓膜を溶かすような猫なで声。
驚いて振り返ると、そこにはサークル内でも一、二を争う派手めな美人後輩、北宮なみがいた。
茶髪のセミロングに、りくには眩しすぎる今時のメイク。
「あ、えっと、なみちゃん？　だ、大丈夫……？」
りくが慌てて声をかけると、なみはとろんとした潤んだ瞳でこちらを見上げ、ニヘラと笑った。
その瞬間、強烈な甘い香りが鼻腔を襲った。
彼女が愛用しているバニラ系の香水と、カシスオレンジの甘い匂い。
「だってぇ……先輩が全然構ってくれないんですもん。……寂しくて、飲んじゃいましたぁ」
なみは呂律の回らない口調でそう言うと、りくの右腕を抱え込むようにして、さらに体重を預けてきた。
「ちょ、なみちゃん、近いって……！」
「んーん。近くないよぉ……」
むにゅぅ……。
りくの二の腕に、とてつもなく柔らかく、そして重量感のある感触が押し当てられた。
なみの最大の武器、Eカップのバストだ。
今日は特に胸元が大きく開いたVネックのニットを着ており、彼女が体を寄せるたびに、深い谷間がりくの視界の端に見え隠れする。
女性経験の少ないりくにとって、そのブラジャーに収まりきらない肉感と熱は、あまりにも刺激が強すぎた。

「……先輩。彼女さんがいるからって、私には冷たいんですかぁ？」
なみは上目遣いでりくをじっと見つめた。
その瞳は、酔っているように見えて、どこか冷静にりくの動揺を楽しんでいるような鋭さを秘めていた。
「そ、そんなことないよ。……ほら、水頼むから、少し座り直そう？」
りくは顔を赤くして、動揺を悟られないように優しく腕を解こうとした。
けれど、なみはそれを許さなかった。
逆に、両手でガッチリとりくの腕をホールドし、自分の胸の谷間に埋めるように押し付けてくる。
「やだ。水いらない。……先輩が欲しい」
「……え？」
周囲の喧騒にかき消されそうな、小さな、けれど明確な囁き。
りくが驚いて顔を覗き込むと、なみはニヤリと口角を上げ、テーブルの下でりくの太ももに手を置いた。
細い指先が、内股の際どいラインを這うようにゆっくりと動く。
「……先輩。私、もう歩けないかも。……ふらふらするぅ」
嘘だ、と疑う余裕すらない。
りくは、目の前の後輩が「酔い潰れて困っている」という事実と、太ももを這う指の熱にパニックになっていた。
なみは完全に「か弱い後輩」を演じきっている。
りくのような優しい男が、困っている女の子を放っておけないことを知っているかのように。
「……だから、家まで送ってくれませんか？……うち、ここからすぐなんです」
それは、ただの介抱の依頼ではなかった。
彼女持ちの先輩に対する、明確な「誘い」。
断らなければいけない。ゆづはがいる。明日はデートだ。
でも、こんなに酔っ払った女の子を一人で帰すなんて、そんな無責任なことはできない。

りくの「優しさ」と「優柔不断さ」が、悪い方向へ働き始める。
「……先輩、優しいから。……捨てていかないですよね？」
なみは耳元で囁き、ふぅ、と熱い息を吹きかけた。
りくの背筋に、ゾクゾクとした電流が走る。
その柔らかすぎる感触と甘い匂いに、りくの理性が少しずつ、音を立てて削られていく。
「……わかったよ。家まで送るよ。送るだけだからね」
りくは困ったように眉を下げ、伝票を掴んで立ち上がった。
なみは「やったぁ♡」と小さく歓声を上げ、りくの腕にさらに強くしがみついた。
その豊満な胸が、ぐにゅりと潰れる感触が腕に伝わり、りくの心臓を早鐘のように叩く。
店を出て、夜風に当たっても、りくの火照った顔は冷めなかった。
むしろ、隣を歩く捕食者の体温が、より鮮明に感じられるだけだった。
これが、取り返しのつかない夜の始まりだとは、まだ認めたくなかった。

第一章：なみの誘惑

タクシーを降り、なみが住む学生マンションの前に着いた頃には、日付が変わろうとしていた。
深夜の住宅街は静まり返り、二人の足音だけがアスファルトに響く。
りくは、肩に全体重を預けてくるなみの体を支えながら、オートロックを抜け、彼女の部屋の前までようやくたどり着いた。
「……んぅ、先輩ぃ……鍵、どこだっけぇ……」
「ほら、バッグの中にあるでしょ？……貸して、僕が開けるから」
りくは仕方なく彼女のブランド物のバッグを探り、鍵を取り出してドアを開けた。
カチャリ、と金属音が静寂に大きく響いた。
中からは、女の子の部屋特有の、柔軟剤とディフューザーが混ざった甘い香りが漂ってくる。
「よし、着いたよ。……なみちゃん、ちゃんと水飲んで、メイク落として寝るんだよ？」
りくはドアノブに手をかけ、努めて保護者のような、優しい口調で言った。
これ以上は踏み込んでいけない。彼女がいる身として、深夜に女の子の部屋に上がるなんて言語道断だ。
ゆづはの顔が脳裏をよぎる。
早く帰って、「無事に送り届けたよ」と心の中で報告したい。
そう思って背を向け、廊下へと踏み出そうとしたその時だった。
「……えぇー？　りく先輩、もう帰っちゃうんですかぁ？」
なみがドア枠に寄りかかり、とろんとした潤んだ瞳でりくの袖を摘んだ。
「当たり前だよ。もう遅いし、僕も明日は朝早いから……」
「やだぁ。喉乾いたぁ……。それに、一人で暗い部屋に入るの、なんか寂しいし……怖いですぅ」

上目遣いで袖をクイクイと引っ張る。
その仕草があざとい計算だと分かっていても、りくのような女性慣れしていない、根が優しい男には効果覿面だった。
酔っ払って足元もおぼつかない女の子を、玄関先で突き放して帰るのは冷たすぎるんじゃないか？　何かあったらどうする？
「でも、ゆづはにも悪いし……。玄関まで送ったから、もう大丈夫だよね？」
「大丈夫じゃないですぅ。……ねえ先輩、お茶一杯だけでいいから。お礼させてくださいよぉ」
なみは、りくの手を両手で包み込み、自分の胸元に引き寄せた。
柔らかい感触が手の甲に伝わる。
「……お願い。一杯飲んだら、すぐ帰してあげるから。ね？」
懇願するような瞳。
りくの中で、「優しさ」という名の隙が、致命的な判断ミスを招いた。
お茶を飲むだけなら、すぐに終わるし……断り続けるのも可哀想だし。
「……はぁ。わかったよ。本当にお茶一杯だけだからね？　飲んだらすぐ帰るから」
「わーい、りく先輩やさしー♡　だいすき！」
なみはパッと花が咲いたような笑顔になり、りくの手を引いて部屋の中へと招き入れた。
それは、蜘蛛が獲物を巣に招き入れるような、逃れられない手つきだった。
通された部屋は、白とピンクを基調にした、いかにも女子大生らしいワンルームだった。
間接照明が温かい色で室内を照らしている。
「先輩、そこのクッション座ってて！　すぐ着替えてくるから！」
なみはりくをローテーブルの前に座らせると、パタパタと洗面所の方へ消えていった。
りくは膝を抱えるようにして縮こまり、居心地の悪さに身を捩った。

壁に掛けられたカレンダー。棚に並んだ化粧品。
ゆづは以外の女の子の部屋にいるという事実が、強烈な背徳感となって胸を締め付ける。
（……早く飲んで、帰ろう。長居しちゃだめだ）
数分後。
扉が開き、なみが戻ってきた。
「お待たせしましたぁ～」
りくは息を呑んだ。
なみは先ほどの派手なニットから、ゆったりとしたサイズの薄いグレーのパーカーと、短いショートパンツという部屋着に着替えていた。
リラックスした服装が、逆に無防備さを強調している。
何より、パーカーの胸元がだらりと下がり、その奥にノーブラであることを予感させる柔らかな膨らみが、歩くたびにフルフルと揺れているのが見て取れた。
「はい、どうぞ」
なみは冷たいお茶が入ったグラスを置くと、りくの向かい側ではなく、すぐ隣――太ももが触れそうな距離にストンと座った。
さっきまでの香水の匂いが消え、お風呂上がりのような石鹸の香りが漂ってくる。
「あ、ありがとう……」
りくは逃げるようにグラスを煽り、一気にお茶を流し込んだ。
冷たさが食道を通るが、体の火照りは収まらない。隣に座るなみの体温が、ジリジリと伝わってくるからだ。
「……ごちそうさま。じゃあ僕、そろそろ行くね」
空になったグラスを置き、立ち上がろうとするりく。
しかし、なみはその肩をポンと押し、強引に座り直させた。

「えー、まだいいじゃないですかぁ。終電もないし、タクシー呼ぶにしてもまだ早いですって」
「いや、でも……長居したら、ゆづはに悪いし」
「……ふーん。先輩、本当に彼女さんのこと好きなんですねぇ」
なみは面白くなさそうに頬を膨らませると、じりじりと距離を詰めてきた。
りくが後ずさろうとするが、背後はソファだ。
「……ねえ先輩。ゆづはさんって、そんなにいいんですか？　真面目すぎて、何もさせてくれないって噂、聞きましたよ？」
「なっ……！　そ、そんなことないよ！　ゆづはは大切にしてくれてるし、僕たちはうまくいってるんだ」
「口だけじゃないですか？　……男の子なら、もっと溜まってるんじゃないですか？」
なみの手が、りくの手の甲に重ねられた。
ひんやりとした指先が、りくの指の間をなぞり、絡め取ってくる。
視線は、りくの股間を一瞬だけ見つめ、またりくの瞳に戻った。
「……なみちゃん、やめてよ。僕は帰るから」
りくはなみの手を優しく、けれど拒絶の意志を持って振りほどこうとした。
だが、なみは引くどころか、その反動を利用してりくの胸に飛び込んできた。
「先輩。……私なら、今すぐスッキリさせてあげられますよ？」
「え……？」
至近距離。
整った顔立ちのなみが、妖艶に目を細めている。
拒絶の言葉を紡ごうとしたりくの唇を、なみの柔らかい唇が塞いだ。
チュッ……。
軽い、啄むようなキス。

りくは目を見開き、思考が停止した。
「……んっ！？　な、みちゃ……っ！」
りくが慌てて顔を背けようとすると、なみは両手でりくの頬を挟み込み、逃げ場を封じた。
「逃がさないですよ、先輩」
再び、唇が重なる。
今度は、深く、ねっとりと。
んむ……、……ちゅ、……レロ……ッ。
なみの舌が、驚いて開いたままのりくの口内に侵入してきた。
お茶の味と、なみの甘い唾液の味が混ざり合う。
舌先が絡まり、上顎を撫でられ、りくの背筋が跳ねた。
「んーっ！　……ぷはっ！　や、やめてってば……っ！」
りくが必死に顔を離すが、唇の間には銀色の糸が引き、プツリと切れた。
なみは余裕の表情で、その糸を指で拭い、ペロリと舐めた。
「……先輩の味。美味しい」
「酔ってるからって、こんなことしちゃ……！」
「酔ってませんよ。……ほら、続き」
なみはりくの抵抗など意に介さず、三度目のキスを落とした。
りくの唇を甘噛みし、舌を吸い出すように絡め取る。
チュパ……、……ジュルッ、……ヌチュゥ……ッ。
部屋に、湿った水音が響き始める。
なみはりくの首に腕を回し、豊満なEカップの胸をりくの胸板に押し付けながら、舌戦を挑んでくる。
レロレロ……、……んちゅ、……ジュルリ……。

「ん、ぁ……っ！　……んぐぅ……っ！」
りくが息継ぎのために口を開けると、そこへすかさず舌をねじ込み、奥まで蹂躙する。
絡み合う舌の感触。熱い吐息。
なみは、りくの抵抗を楽しむかのように、わざと音を立てて吸い付いてくる。
ズチュッ……、……ジュルルッ……、……ハムッ、……んちゅ……。
（だめだ、だめだ……っ！　ゆづはがいるのに……っ！）
頭では拒絶しているのに、体は正直だった。
なみのテクニックと、柔らかい感触、そして甘い匂いに、脳がとろとろに溶かされそうになる。
りくの手が泳ぎ、なみを押し返そうとするが、彼女の華奢な体に力が入らない。
いや、入れたくないと無意識に思ってしまっているのかもしれない。
その隙に、なみの手がパーカーの下からりくの腹に触れ、そのまま下へと滑り落ちていく。
そして、ズボンの上から、りくの自身を鷲掴みにした。
「……んっ！？」
クニュ……。
明確な熱と硬さを、なみの掌が捉える。
その瞬間、りくの中で警報が鳴り響いた。
これ以上は、戻れない。
「……だめだッ！！」
りくは最後の力を振り絞り、なみの肩を強く突き飛ばした。
ドサッ、となみがクッションの上に倒れ込む。
りくは荒い息を吐きながら立ち上がり、ズボンのシワを直した。
「はぁ、はぁ……っ！　なみちゃん、いい加減にしてよ！　僕にはゆづはがいるんだ！　……こういうのは、絶対にだめ

なことなんだ！」
りくの声は震えていたが、そこには真剣な拒絶の意志があった。
初めてできた大切な彼女。
その重みは、りくの弱気な性格の中に、一本の鋼のような芯を通していた。
そんなりくの必死な姿を見て、なみは倒れたまま、ゆっくりと体を起こした。
怒るでもなく、泣くでもなく。
彼女は、くすりと笑った。
「……先輩。今、何て言いました？」
「え……？」
「『だめなこと』って言いましたけど……。先輩のここ、どうなってるんですか？」
なみの視線が、りくの股間に注がれる。
そこは、なみの濃厚なキスと愛撫によって、ズボンの生地をテントのように押し上げていた。
「そ、それは……生理現象で……っ」
「……気持ちよかったくせに」
なみは立ち上がり、りくに一歩近づいた。
「キスされて、胸押し付けられて、勃っちゃったんでしょ？……その瞬間、もう心も体も反応してたってことじゃないですか」
「ち、違う！　僕は……」
「違わないですよ。……ほんの少しでも『気持ちいい』って思った時点で、もうそれは浮気なんじゃないですか？」
なみの言葉が、鋭いナイフのようにりくの良心を抉る。
反論できない。
確かに一瞬、彼女のキスに溺れそうになった。彼女の胸の感触に興奮した。

その事実は消せない。
「……それでも、僕は帰るよ。……ゆづはを、裏切りたくないんだ」
りくは唇を噛み締め、玄関へと向かおうとした。
その背中は、弱々しくも、必死に最後の境界線を守ろうとしていた。
そんなりくの後ろ姿を見て、なみの瞳に暗く、深い炎が灯った。
――欲しい。
こんなに頑なな先輩を、メチャクチャにして、私だけのものにしたい。
その「誠実さ」を、私への「欲情」で塗り潰したい。
「……じゃあ、先輩。賭けをしましょう」
なみの冷たく、楽しげな声が、りくの足を止めた。
りくが恐る恐る振り返ると、なみはパーカーの裾を摘み、ゆっくりと持ち上げ始めていた。
「……賭け？」